

## 農村から人口減少時代を考える

# 「建設的」な日本の縮小の姿とは？

「拡大路線」という時代は終焉を迎えつつある。けれども、日本が縮小しても、それなりに幸せに、豊かに暮らしていく方法もあるはず。人口減少時代を、農村側から見たら、どんな近未来が描けるのか？

金沢大学人間社会研究域准教授

## 林 直樹

●はやし・なおき 1972年広島県生まれ。京大大学院農学研究科博士後期課程修了、博士（農学）。横浜国立大大学院の産学連携研究員、東大大学院農学生命科学研究科の特任准教授などを経て、現職。

### 人口減少時代の未来を考える

——十年ほど前に『撤退の農村計画』という本を出版されましたね。当時は撤退という言葉のインパクトが大きかったようですが、そもそも撤退という言葉は、一度引いて力を温存し、攻める準備を待って待つという意味で、敗北ではありません。

余裕がなければできない、ある意味、贅沢な選択肢とも言えます。しかし今、それがどこでも選択できるかとなると、厳しいものがあります。——日々、状況は変化しているので

すね。はい。私は村づくりを農村側からとらえる研究、農村計画学が専門です。人口減少時代では、農村・山村といった山間の過疎地を研究するこ

とは深い意味があると思っています。これまでは人口が増えて社会が膨張してきましたが、これからは縮小の時代に入ります。山間地で起きていることが、数十年後には平地の村や町、さらには都市近郊でも起こる可能性があります。山間地の今を考えるのは、将来の平地の町を考えることにつながっていきます。さらにいうと、これからは日本にとどまらず、

東アジアでも急速な人口減少が始まります。山間地の研究を世界へ発信するという意味でも大きな役割があります。

「山間地の集落」といっても内実は多様です。千人を超えるような大集落もあれば、五人しかない集落もあります。よく、過疎の村で地域おこしがうまくいっている事例が紹介されますが、実は数百人規模の比較的大きな集落だったりします。そのような背景を考慮せずに、「○○地域がうまくいっているのなら、うちでも同じことをやればいい」というのは考えものです。

また、山間地の小集落の世帯収入が少ないということはありません。大きな農村といった他の地域と比べても差はわずかです。

このような前提をもとに、過疎集落の現状について、お話ししたいと

思います。

### 無住化の議論をタブーにしない

——過疎の村では今、何が起きているのでしょうか？

実は、過疎化や無住化（集落一帯の居住者がゼロになること）は、かなり前から進んでいます。山間地で二〇一〇年以降に無住化した集落の数は七十九、そのうち六十九が自然消滅、という国交省・総務省の調査があります。

無住集落といえど、廃墟だらけの無残な姿を想像すると思いますが、これは誤解であり、むしろそのような集落は珍しいのです。土地は手放さずに定期的に訪れて草刈りをして、まるで人が生活しているような無住集落もあれば、まったく人が入らず森林に変化しているところもありま

す。絵に描いたような廃墟だらけの不気味な廃村（放棄された村）は、むしろ少数派といってよいかと思います。

人口が減っていく中では、ある程度の無住化は避けられませんし、別に悪いことでもないと思います。これまで「無住化」「撤退」といった話は、後ろ向きだとタブー視されてきました。しかし、「住み続けたい人がいる」という理由でその種の議論をタブーにするのは上策ではありません。タブーにしたところで状況がよくなることはありませんし、何より、無為無策のまま無住化したときのダメージは決して小さくないからです。

まずはあらゆる選択肢を議題のテーブルにのせ、そのうえで住民たちがどう考えるのかを話し合う。そういうことが大事なのです。